

雑誌 SD 特集号「空間の生成」1971年5月より抜粋

<P6-7>

丘の上のキャンパス

吉村順三

6年前に、私が始めてこの愛知県立芸術大学の敷地を訪れたときは、この辺り一帯は静かな農村地帯で、丘の上から見渡す風景には一軒の人家も見えなかった。

処々に彩りの野の花が咲いていて、丈の低い松の木の茂る丘陵が幾重にもつらなり、遠く木曾の山々が美しく眺められた。

大空の下に広がるこの丘はまた、長久手の古戦場ともつながる歴史的にも由緒のある土地である。

静かな山並みを眺めつつ、私はこの土地に芸術の学園を建設することの意義を改めて深く考え、建築家として意欲にもえたのであった。

設計にあたって、第一に、この丘を理想的なキャンパスとするためには学園の建物はどうあるべきか、どうしたらこの自然の条件を損なうことなく、いきいきとした楽しいキャンパスを創ることが出来るかということ考えた。

そして、建物をラビリンスの様な人為的な一つの塊とせず、明るくダイナミックに丘の上に展開させるということを前提とした。

大空や緑に共鳴する用なキャンパスの姿をいろいろと夢に描いていった。

建物はお互いに適当な距離を保ち、建物と建物の間につくられる変化のある空間は、人々の快適な通路、楽しい休憩の場所、研究や作業の後の交流の場となる。

キャンパスを構成する主要な建物は中心に自由な広場を、この広場からは、遠く
の山々や丘陵が眺められる。

これらの建物はそれぞれの目的にしたがった最も単純な構造を持ち、ピロティ
や開放的な廊下で接続されている。

全体計画からここの建物へ、計画は着々と進められて行った。

6カ年の工事計画に従っていよいよ建設が始められ、第1年度には中央の長い講義室棟の建物と、音楽・美術の建物の一部が建設された。

第2年度には、150人の新しい生徒が入学してきて、学園も賑やかになった。

おのこの建物の機能がフルに生かされるとともに、次々に新しい建物が増えて行った。1970年春には、第一回の卒業生が巣立って行った。

そしてこの3月、はじめに計画されたすべての建物が完成された。

各教室では、教師や生徒がそれぞれの研究にはげんでいる。

キャンパスの広場には学生が行き交い、いきいきとした学園生活が見られるようになってきた。

大空の下に、自然と人と建物が融合して、最初に私の夢みた学園の姿が美しくここに実現したのである。

このようにスムーズに工事が運ばれ、ほとんど理想的な学園が完成されたのも、愛知県知事を始め、県関係者の方々や大学の学園建設に対する非常な情熱と、御配慮のあらわれであり、これなくしては今日の結果は生まれなかったであろう。

予期された事ではあるが、この6年間に名古屋市周辺の都市化は予想以上であって、キャンパスから見る遠近の丘には、ビルや人家が建ち並び始めている。

桑原知事の構想された愛知芸大とその周辺の緑の地域は、ますますその価値をあらわすであろう。

いぜんには人里離れたこの土地も、学園誕生によりもはや隔絶された土地ではなく、名古屋市につながる親しみのある場所となってきた。

日曜日には、キャンパスの庭に市民の姿も見られ、大学と市民の交流も行われている。

やがて緑に包まれた学園の中で、市民のための音楽会や展覧会も開かれるであろう。

愛知県立芸術大学が、真に市民のオアシスとして、また、日本文化の向上のために、意義ある存在となる事を祈ってやまない。

< P 9 >

環境と大学の構成

不明

名古屋市街を東へ、東山の団地をすぎると、そこから瀬戸までは、ひくい松の茂った比高3-40mの丘陵が連なり、その間に水田と農業用水池の散在する地帯が続く。

長久手村の丘陵は、やせた流れやすい地味のために、貧弱な砂防林として保たれ、かつての古戦場の面影を今に残している。

しかし、東名高速道路名古屋インターチェンジとそれに通ずる道路・地下鉄の整備、名古屋市の膨張の圧力は、長久手の地位を変えようとしている。

無秩序なスプロールが、急速に進んできている。

一方、ここはまた、名古屋とそれから20 km圏上の瀬戸・豊田・刈谷等の諸都市との中間地点でもある。

多くの大学・教育施設が、名古屋市内から、この中間地帯15～20 km圏上に移転しつつある。

愛知県は、長久手の丘陵部を占める県有地に、愛知芸大・農業センター・青少年公園・県立大学（移転予定）などの大学・社会教育施設を計画し、それによってこの地域を性格づけようとしている。

愛知県立芸術大学は、初年度工事の出来上がった1966年春に開学した。

名古屋から車で40分、東名古屋インターチェンジから8 km、敷地は丘陵の2つの端部と、2つの農業用水池をとりこみ、面積約40 km²を占めている。

大学の構成は、美術・音楽の2学部から成り、美術学部は絵画（油画・日本画）・彫刻・デザイン、音楽学部は声楽・器楽（ピアノ・弦）・作曲の各専攻に分かれる。カリキュラムは、実技（制作・演奏など）を中心として、専門学科・一般教養講義が並立して行われる。

学生数は、学部600人、大学院修士コース68人、計668人である。

少数教育あるいは個人指導を主体とする実技教育が行なわれ、お互いに影響し合いまとまり得るキャンパスの規模を保つという意味から、また、地方自治体の持つ大学としての性格から、今後の学生数の増大が、キャンパスの構成に影響を与える程にならないと考えた。

われわれは、規模算定段階から参画することが出来た。

キャンパスの建築規模は、校舎関係25,000 m²、寮・住宅関係5,500 m²であり、学生1人当たりの面積は46 m²（国・公立大学・短大・高専平均26 m²—1968年文部省教育施設部資料）である。

実技のための施設は、学生数にかかわらず、それぞれ最小限の広さが必要であり、また、多種目について用意されなければならない。

それ等の集積となるため、他大学に比較すれば大きな面積を必要とする。

地方自治体を持つ大学は、市民との接点—理念に留まらず、日常的な形の上でも一を持っていなければならない。

愛知芸大では、公開の演奏会や展覧会が催されるという形で、日頃の創作活動を直接市民にかえすことが役割りの一つであるとともに、キャンパス自体も、市民が自然の中でいこい、野外で彫刻を観賞する公園として使われることも計画の要素とした。

計画は1964年に始まり、65年着工、6カ年計画で順次施行、1971年春にほぼ完成した。

<P12>

愛知芸大のデザイン

奥村昭雄

“のびやか”で“いきいき”した、それが、われわれが愛知芸大キャンパスに求めた生活と空間であった。

キャンパスで展開される生活の主要な舞台は、建物自体ではなく、その“間の空間”であり、そこでの生活こそ、キャンパスのドラマの中心でなければならない。

ひくい松の茂る丘の重なり、散在する溜池、開けた視界、その中で建物は風景に定着するのびやかな構成をとり、重なる丘と空へのひろがりをもった“間の空間”を作ろうとした。

少ない学生数のキャンパスで、創作活動の場としての個々の部分の特性を保ちながら、しかもいきいきとした“全体場”を構成するために、全体の領域の中に、人とその生活自体を参加・登場させることを試みた。

個々の建物はキャンパスの主要な舞台である“間の空間”を構成し、性格を与える大道具である。

内的機能を抽象するそれぞれ独自の形態を外部に主張し、それによっていきいきした“全体像”を作り出そうとした。

この場合に、その群に統一を与えるものは“やせた形”“自然とのなじみ”“軸線”“量と間合い”“視線”“広場”であり、共通デザインモチーフの繰り返しという手法はとらなかった。

全体場への参加この計画では、従来の個々のジャンル別に行われる芸術教育のありかたを前提として進めた。

その上で、おのおのが閉鎖的にならず、お互いに影響し合いながら、全体としての一つの場を作り出すことを目指した。

教官・学生の創作の場である芸術大学では、個々の部分は、はっきりとした特性をもち、アトリエやレッスン室のように独立性を求めるものが多い。

必要な独立性を保ちながら、全体としての閉鎖性を排するために、キャンパスでも生活・活動自体を出来るかぎり全体場へ参加・登場させようとした。参加の仕方には、ガラスごしの参加から活動自体の登場、小広場から中心の広場へのつながりといった段階性をもたせた。

美術学部小広場は、屋外の石彫場につづき、大制作をするために各科で共用している大工房がそれに面しており、また、美術学部の主要な動線の集まるところでもある。

さらに、美術学部の“顔”である石膏室を透き通して、デッサンをしている学生達や石膏像のシルエットをその“場”に加えて、小広場は中心の広場へとつながる。

同じように音楽学部小広場は、透き通しの各科学生のたまり場や玄関ホール、奏楽堂ホワイエ・楽屋への動線でかこまれ、キャノピーを通して中心の広場へつながる。

全体の広場には、学生食堂やクラブ室前のルーフテラスに集まる学生達、講義室棟廊下を行ききする人々、図書館閲覧室・大学本部事務室・石膏室・奏楽堂ホワイエなども参加する。

このような関係は、美術学部工場群の中庭、体育館の前庭などにもつくられている。

こうして表出されたおのおのの行動の集まりが“全体場”の性格をつくり、量的なものによらずに、キャンパスをいきいきさせる可能性を生みだし得ると考えた。

この空間の構造は、同時に、全体を把握するための構造でもある。

群としての取りあつかい

われわれは、集合した建築群のデザインに当たって、芸術大学の包含する多様なものの性格を強く表出することによって、それらが集まって作り出すいきいきした全体像を求めようとした。

それ故、デザインの統一のための媒介要素を用いる手法（様式的統一あるいは共通デザインモチーフの繰り返し）はとらなかった。

最初に、キャンパスを構成する主要な機能を分担するブロック区分を行った。

そして個々の建物では、必要なものを現わし、取り去れるものを取り去った形としての“やせた形”によって、内的機能の抽象化をはかった。

講義室棟では、教室群だけで3階を構成し、2階にはそれに付随する廊下・階段・研究室などをそれぞれの形のまま取りつけた。

“やせた形”はまた、可能なところでは“向こう側までの透き通し”となって、キャンパス内外の空間のつながりを作り、重ね合わされた視線に生活のシルエットを参加させた。

はりぼてを排し、群に“やせた形”という統一を求めたともいえる。

<P24>

自然環境とのなじみ

不明

建物・広場・道路は、地形と自然環境の持っている性格に従って配置した。造成土量と自然林の破壊を出来るだけ少なくすることが計画の重点の一つだった。

長久手のこのあたりの丘は、こまかく浸食されたやせた土質ではあるが、松の間には、春は山つつじが咲き、時に野兎やりす・きじなどの小動物も見られる。

敷地中央部は、丘の南北2つの部分とそれをむすぶせまい尾根状部分から成っている。

その尾根に東西から入り込む沢は、それぞれ池に向かって開き、沢を通して、一方は瀬戸の山や遠く御嶽山が望まれ、一方には名古屋東山の市街が望見される。

進入路は西側の沢に設定した。

愛知用水ぞいの村道とグリーンロード（工事中）の小さいインターチェンジが

らゆるやかな丘を登ると、池に出て、校舎群が最初に目に入る。

進入路は、2つの池の間の堤防の上を通り、沢の南斜面に沿って登って丘の北の部分に達する。(P9 図)

美術・音楽両学部ブロックは、丘の南の部分の東西両翼に---平面的な広がりを必要とする美術学部は開けた地形の西の翼に、集約する事の出来る音楽学部は、東の翼に池に面して---置いた。

両学部を結ぶ軸と直交する軸に沿って、共通ブロックを配した。

講義室棟は、尾根の上に位置して、それ自身、キャンパス中心部への導入空間を作り、一方、元々あった2つの沢の空間のつながりを、ピロティによって残した。

ブロック群の構成に当っては、囲われた場所を作らず、キャンパス内部から外の空間へのひろがりを作ろうとした。

2つの沢は、構成上の大きな要素となった。

丘の南の部分の高まりは、広場を抱き込んで、自然の境となった。

運動場は、東の池の南側に沢を埋めてつくり、造成土量をそこでバランスさせた。

学生寮・教職員住宅などは、西側の山すそに配置した。

<P42>

広場

不明

キャンパスの中心の広場は、2つの部分から成っている。

講義室棟に沿う部分は、モールとしての性格をもっている。

大学本部前の階段を登ると、左に池、右に沢を通して開けた風景があり、キャンパスの構成を一望しながら中心の広場へとつづいている。

モールは、公開演奏の場合の奏楽堂へのアプローチでもあり、徐々に彫刻が置かれて、休日の市民の公園としてのキャンパスの中心となるであろう。

モールと中心の広場とは、はっきり区分されてはいない。

奏楽堂前のひろがり、学生ホール前の芝生、池と植え込み、機械室棟屋上の広場が、東西の動線軸である渡り廊下の南北に配されている。

そして、それをとりまく石膏室、音楽玄関ホール、食堂、クラブ室とそのルーフトラス、閲覧室などが、ガラス面を通して、あるいはシルエットとなって参加して、活動空間を性格化している。

中心の広場はまた、美術小広場、音楽小広場、食堂南側のテラス、図書館東側の写生花壇へとつながっている。

< P49 >

視線と軸線

不明

この計画の軸線は、建物の中心軸とか、建物がそれに沿って配列される線ではなく、間の空間によって感じられるようなひろがりを持った、“軸の空間”として置かれている。

従って、それは視線の主軸でもある。

軸線の方法は地形から引き出され、北光線を求めるアトリエの性格から、ほとんど方位と一致する東西・南北軸として設定された。

東西の空間軸は、一方では石膏室を透して、美術小広場をぬけ、一方では音楽キャノピー・小広場から、音楽学部棟のピロティを透して、外の空間へと伸びている。南北軸は、講義室棟で強調され、南北の丘へのびている。

この二つの軸は、行動の軸であり、設備幹線の軸とも一致している。そして建物の量と間合いのバランス軸でもある。

視線には、四つの構造を与えた。

キャンパス内部から外の環境へつづく視線は、地形に従い、閉鎖的でない建物配置によって作られた。

沢・池・丘の重なり・山々や街が、間の空間に流入し、ひろがりを与えた。

中心の広場からは、キャンパスの全体像は一望に把握できる。

広場に入ると、建物とその相互の関係がとらえられ、進むに従って、そこに展開される、さまざまな生活があらわれる。美術・音楽の小広場でも、その段階での把握のための視線の構造がある。

ピロティやガラスによる向こう側までの透き通しによって、視線は幾重にも重ね合わせられている。

相互的な全体認識を与えながら、奥行と変化をつくりだしている。

一方、個々の建物からも、広場に向かう視線があり、部分が全体場の中にあることを認識できる。

大学本部では、キャンパスの構成を眼前にひろげながら教授会が行なわれるであらう。

それ自身は閉鎖的であるアトリエでは、前室の開口がその役割をはたしている。講義室棟は、こうした視覚構造の基線として働いている。